

Woman and Sympathy in Nathaniel Hawthorne's Works: From the Romance to the Real

田島, 優子

<https://hdl.handle.net/2324/6787695>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (文学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 田島 優子

論 文 名 : Woman and Sympathy in Nathaniel Hawthorne's Works:
From the Romance to the Real
(ナサニエル・ホーソーン作品における女性とシンパシー
——ロマンスから「現実」へ)

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

アメリカン・ルネサンス期の作家、ナサニエル・ホーソーン(1804-1864)は、自身の作品を一貫して「ロマンス」として位置付けたことで知られる。彼が『七破風の屋敷』(1851)の序文で記したロマンス論は、のちのリチャード・チェイスによる「アメリカ小説ロマンス説」の議論の出発点となった。しかしながら、実のところホーソーン文学のロマンス性については、さまざまな疑問が呈されてきた。第一に、代表作の『緋文字』(1850)以降、『七破風の屋敷』から『ブライズデイル・ロマンス』(1852)、晩年の『大理石の牧神』(1860)にかけて、次第に作品のロマンス的特性が希薄になっているという美学的な観点からの指摘である。アメリカが南北戦争という現実へと向かう中で、晩年のホーソーンが作品を完成させられなかったこともあり、ロマンスからの離反(ノヴェルへの接近)は、作者の文学的想像力の「低下」として捉えられる傾向にある。第二に、1980年代に台頭したニュー・アメリカニストらによる「アメリカ小説ロマンス説」への政治的コンテクストでの批判が挙げられる。これらの批評家たちは、冷戦下においてアメリカ文学を独立した学問領域に仕立て上げるために現実からの遊離を可能とするロマンスを採用し、特権化したとして先代のアメリカニストらを攻撃した。この流れの中でホーソーン作品がロマンスであるという定説自体が疑われることになった。

こうした先行研究を受けて本研究は、ホーソーン作品のリアリズム的要素に着目することで、上の二つの問題に応接することを意図する。後期作品におけるロマンス性の低下への批判、また、ロマンスというジャンル付けを否定する批評からは、ホーソーンの後期作品に見られるリアリズムへの評価が欠落している。ホーソーンは「税関」において「現実的なもの」と「想像的なもの」の混じり合う「中間領域」をロマンスの場として呈示した。作者が寓意や象徴への愛着を示すために、従来「想像的なもの」に焦点が当てられがちであったが、特に後期作品の豊かな複雑性を作り上げているのは、むしろ彼のロマンスの中に否応なく忍び込んでくる「現実的なもの」の方にあるように思われるのである。作品にみられるリアリズム的要素に着目することで、美学的な観点から後期作品を再評価できることはもとより、ロマンスによって現実

の問題を等閑視したとされる政治的コンテクストでの批判から、ホーソン作品を解放することが可能となるのである。

そうした検証に際し、具体的には女性登場人物に着目し、彼女たちがホーソンのロマンスに「現実」をもたらすことを明らかにしたい。知性や思考を象徴する男性に対して、女性は人間的な情熱や温かみをもち、社会的繋がりをもたらす者として作品に登場する。ロマンス的な寓意が目立つ 1830 年代の短編作品群においては、彼女たちは「家庭の天使」として描かれるものの、男性人物の特性を引き立たせ、作品の寓意を表現する存在にすぎない。しかし特に『緋文字』以降の長編において、女性たちは「人間化」され、深い葛藤を抱き、他者に共感することで社会的繋がりをもたらす。ロマンスでは概して宗教的、倫理的な主題が扱われるのに対し、社会的現実を描くノヴェルでは、人間同士の関係性が問題となるが、女性たちは共感によって、ホーソンのロマンスにノヴェル的な「現実」をもたらすのである。

以上のことを検証するため、本論文ではホーソンの主要作品を出版順に取り上げ、女性登場人物の示す共感によって作品に現実がもたらされ、特に後期作品がノヴェル化されていくことを明らかにする。第 1 章では、1830 年代短編初期においては女性が神秘化・象徴化されるにすぎないが、40 年代の「瘧」や「ラパチーニの娘」といった作品では、他者への共感を抱く「人間」として描かれ始めていることを指摘する。第 2 章では、代表作『緋文字』を取り上げる。17 世紀的のピューリタニズムに基づくロマンス的な語りを体現するディムズデイル牧師が、共感によって強固なピューリタンの共同体を築くのに対して、個人主義の精神によって 19 世紀的な「現実」を体現するヘスターは、個人間の共感によって女性による小さなコミュニティを確立していることを論じる。第 3 章では、『七破風の屋敷』におけるピンチョン家とモール家の和解という結末が、女性たちの共感によってもたらされることを検証する。本作においても、共同体の基盤としての共感以上に、親しい個人間の愛情にもとづく共感の重要性が強調される。第 4 章では、『ブライズデイル・ロマンス』において、ゼノビアという女性の人間らしい活力が、最終的には語り手としてのカヴァデイルのロマンスを崩壊させ、物語をノヴェルへと接近させていることを明らかにする。第 5 章は、『大理石の牧神』を取り上げる。ヒルダは悪の存在を知ることによって現実世界へと墮とされるが、このことで友人への共感能力を得るのに加え、想像性と現実性を融合させた芸術家となりうる可能性が示唆される。彼女に導かれ、想像と現実との間に芸術を求めケニヨンは、作者自身の最終的な芸術観を提示すると結論づける。

ホーソンの作品はフェミニズムのような明確な政治性を持つものではないし、19 世紀中葉における中産階級の白人男性のイデオロギーから、作者もまた自由であったわけではない。それでも、白人男性主要作家が女性をリアルに描くことがほとんどなかったと批評される時代において、女性に共感の眼差しを向け、その葛藤を作品に描き続けたという点において、ホーソンは稀有な作家であったと言える。以上のように本研究は、女性への共感が彼のロマンスの女性登場人物を人間化し、そして女性の抱く共感が彼のロマンスをノヴェルへと接近させていく、その過程を跡づけることを目的とする。